

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年 5月30日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K01761

研究課題名(和文) 父親の養育不安尺度の作成と養育不安に影響を与える諸要因の検討

研究課題名(英文) Development of a scale about father's child-rearing anxiety and a study for factors on their child-rearing anxiety

研究代表者

山際 勇一郎 (Yamagiwa, Yuichiro)

首都大学東京・都市教養学部・准教授

研究者番号：00230342

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は父親の養育不安に焦点を当てた検討を行った。研究1では、就学前、小学生低学年、高学年の子どもをもつ1286人の父親に対して養育不安について自由記述による回答を求めた。研究2では、713名の父親に対し、既存の母親の育児不安尺度19項目に加え、自由記述の結果に基づいて、32項目を追加した養育不安尺度を実施した。自由記述および新評価尺度ともに、父親の養育不安は、直接的な子どもとの接し方に起因する不安ではなく、職種、収入、環境等の間接的な事柄に起因する不安が中心であることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study focused on anxiety about father's child-rearing. In Study 1, 1286 fathers who have the preschoolers or elementary school low or high grade students, answered open-ended questionnaire about their child-rearing anxieties. In Study 2, 713 fathers answered the rating scale which was constructed from these results. This scale have 51 items containing 19 items from the existing mother's child-rearing anxiety scale. Results show that father's child-rearing anxiety are not caused by direct contact with children but caused by indirect matters such as job category, income, home environment and so on.

研究分野：心理学

キーワード：養育不安 父親 テキストマイニング 尺度

1. 研究開始当初の背景

平成22年6月施行の「改正育児・介護休業法」では、父親の子どもの養育への参加を促進することが主たる改正目的の一つであった。また、イクメンという言葉も流行した。これらのことから父親の養育参加についての社会的認識の高まりを知ることができる。実際に、父親が養育をする機会も増加し、養育参加数も多くなってきている。

ところで、育児は母親の役割であると考えられてきた歴史は非常に長く、それゆえ母親の育児に関する研究は多方面から検討されている。育児不安についても研究は多く(安藤ら, 2006; 宮本, 2008; 住田・藤井, 1998; 渡辺・石井, 2005 など)、母親の育児不安の増加傾向を示す統計や資料も多い(労働政策研究・研修機構, 2003 など)。また、自治体等における相談・支援も広がり、母親の育児不安の問題とその対応などが社会において特殊なことではない状況になっていると考えられる。このように、母親の育児に関する研究は多く行われている一方で、父親の養育に関する研究は十分であるとは言えない。

父親を対象とした養育支援についても体制・組織が整えられ、公的機関等では統計資料を蓄積するようになりつつはある。父親の子育てを支援するNPOも増えてきており、そこでは相談・助言、啓発ということが盛んに行われるようになってきている。しかし、2つの問題点をあげることができる。第1点は、そこでの議論や相談・助言の基盤となっている材料は事例によるものが多く、客観的な材料に基づいているものが少ないことである。そして、第2点は、客観的な数値資料であっても、そこで使われるものは社会的、制度的な側面に限定的であり、個人的な変数に至るまで検討はされていないことである。すなわち、父親の養育研究については、客観的でありかつ個人の内面的心理学的な知見は十分とは言えないのが現状であると思われる。

父親についての総合的な研究として、乳幼児の父親を対象にしたベネッセ次世代育成研究所(代表: 汐見, 2009)や父親の役割などを扱った尾形(2011)など評価の高いものがある。これらは、内面的心理学的変数にも検討は及んでいるといえる数少ない研究と思われる。しかし、本研究で取り上げる養育不安の尺度作成等による系統的な検討には至っておらず、父親による養育の現状についての報告にとどまっている。このように、父親の養育不安についての学術的な研究は皆無であると言えよう。

2. 研究の目的

母親の育児不安は重要な問題として取り上げられて久しい。たとえば、渡辺・石井(2005)では、母親の自己効力感が育児不安を説明する変数としての重要性を明らかにしている。このような心理学的な検討は、尺度を作成しそれを用いて行われる。しかしながら、父親

の養育不安については父親を対象として作成された尺度はない。山際・渡辺の一連の研究では(山際・渡辺, 2010, 2011a, 2011b, 2012)、当初の目的が母親の育児不安研究との比較であったため、母親を対象として作成された養育不安尺度を用いて種々の変数との関連の検討している。しかし、Shawlb *et al.* (2012)においてや、山際他(2013)による日本教育心理学会第55回総会での準備委員会企画シンポジウムにおいて、父親の子どもへの関わり方は社会的、文化的、経済的要因が重要であることが議論されているように、父親の養育不安も社会、経済的要因によって左右されることが容易に推論できる。しかし、母親の尺度を援用するに限り議論に限界があると考えられる。たとえば、母親では有効な変数であった自己効力感が父親では養育不安と関連を示さなかったが(山際・渡辺, 2011b)、もともと関連がないのか使用した尺度によって生じた問題であるのかが厳密には明らかにできない。したがって、本研究では、父親オリジナルの養育不安尺度を作成し、あわせて社会的要因との関連を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

研究は2段階であり、研究Iでは、自由記述によって父親の養育不安の基礎データを収集した。研究IIでは、それらを基にして評定尺度を作成し諸要因との検討を行った。いずれも後述のようにweb調査を用いた。

研究Iでは、基礎資料収集のために、まず、2015年2月上旬に第1回のweb調査を行った。0歳児から小学生の子どもを持つ父親814人が回答したが、さらに2月下旬にweb調査を行い、366人を追加した。web調査を用いたのは、サンプリングの精度を高めるためであった。一般的に、母親の育児不安調査は保健所などの定期健診時や、自治体のサークル活動を利用した調査が多い。しかし、このようなサンプリングは偏りがある。たとえば、自治体のサークル活動参加者を対象にした場合、その団体の趣旨によっては、特定の育児観を持った母親や育児不安の強い母親がサンプルになる可能性が高い。同様のことが、父親にもあてはまるだけではなく、父親の場合は、母親以上に養育への関心や養育不安などの傾向が強い対象者がサンプルになる可能性が高くなると考えられる。また、実際的に任意の集合法では父親のサンプル数を十分に見込めないこともあげられる。web調査の場合は、サンプル数を確保するだけでなく、条件にあった父親をスクリーニングにより対象者とするのが可能である。本研究においても、第1回目の調査では給与所得以外の父親のサンプル比率が、日本全体を母集団とする状態の比率より少なかったため、追加調査を行った。最終的に、給与所得者が80%、自営業・自由業等が20%と日本全体の比率とほぼ同じであった。また、就学前、小学生低学年、高学年の子どもをもつ父親と母親の平均年齢も現状とほ

ば一致している。

研究Ⅱにおいても、職業、年齢の構成が就学前から小学校高学年の子どもを持つ親の母集団と同じ構成となるように、web 調査を実施した。対象者数は713名であった。

4. 研究成果

研究Ⅰの主な結果と考察

子育てについて悩みや不安が特にないと答えた父親は344人であり全体の26.8%であった。子どもの年齢が小さいときに最も養育不安が小さく、小学校低学年で多少増加し、高学年で減少する傾向があった。養育不安はすべての父親がもっているわけではないが、7～8割の父親はときには複数の不安や悩みを持っていると答えている。

自由記述の内容にしたがって養育不安を分類し、頻度順に並べた(表1)。

表1 発達別養育不安の内容分析

	前	低	高	合計
健康, 身体的問題・成長など	59	33	42	134
ともだち関係	41	39	37	117
いじめ問題	29	57	30	116
学力・勉強, 習い事・塾	12	48	41	101
性格	31	39	30	100
経済状況	30	20	24	74
将来, 子どもの成長	27	19	28	74
基本的な生活態度	28	19	12	59
受験, 進学	3	28	27	58
園, 学校生活	38	9	10	57
親子関係	8	20	22	50
国の将来, 社会情勢	12	7	15	34
家庭教育	16	10	6	32
事件事故	8	16	5	29
心理的問題	8	12	5	25
学校教育	6	7	9	22
就職, 進路(進学を除く)	4	7	11	22
発達障害	11	3	3	17
ゲーム	2	5	7	14
運動	0	8	3	11
時間がない	5	4	1	10
自律できるか	2	1	7	10
スマホ	0	2	7	9
一人っ子	5	1	3	9
能力, 知的発達	4	3	2	9
他の親	3	1	3	7
住環境	4	1	2	7
モンスターペアレンツ	0	1	5	6
集中力不足	3	1	2	6
異性関係	0	0	5	5

399 421 404 1224

頻度5未満: 英語教育, 非行, 夫婦関係, きょうだい仲,

最も頻度が高い内容が健康, 身体的問題・成長などに関する不安であった。友達関係やいじめ問題を不安に思う父親も多く, その他は学力面, 性格面, 経済状況に関して不安が高かった。このように, 養育不安は子どもの生育環境や社会生活に関する意見が非常に多い。回答が少なかったものは, 英語教育, 非行, 夫婦関係, きょうだい仲, 障害, 転勤などで, それぞれの家庭特有の状況を反映している内容であると考えられる。山際他(2013)で, 父親の子育てには社会・経済的要因が深く関わっていることが議論されているが, 子育てがそうであるならば, 養育不安も, 社会・

経済的要因が影響していると考えられる。もちろん, 健康, 身体問題, 学力等, 性格などの子どもの一般的な発達に関する不安も多く見られる。しかし, 直接的な子どもとの関わり方に関する不安は少ない。回答に見られた, 時間がない, 親子関係, 家庭教育(しつけの仕方)などが直接的な関わり方に関する不安と考えられるが, 不安内容全体に占める割合は小さい。これに対して, 母親の育児不安は, たとえば, 渡辺・石井(2015)に見られるように, 育児に自信が持てない, 失敗するのではないかと思う, どうしつけたらよいかわからないなどの育児に対する否定的な態度と, 一人になれる時間がない, 仕事や趣味が制約されるなどの育児に拘束されることに対する不安というように, 直接子どもへの接し方に関する事柄に不安が強いが, 父親の自由記述の内容には少ない。ただし, これは自由記述回答という回答形式を用いたことが影響しているかもしれない。しかし, 森下(2011)が議論しているように, 父親の関わり方は2次的関わり方あるいは母親へのサポートとしての関わり方が一般的であるようだ。言い換えると, 未だに子育ては母親が担い手の中心であるとされていることがうかがえる。なお, 父親と母親の子育て不安の大きさの差異については, 山際・渡辺(2011)で母親の育児不安より父親の養育不安が低いことが示されているが, 上述の結果から, 父親と母親においてもともと不安内容が異なることが不安の大きさの違いをもたらしており, 用いた尺度が不十分であったと解釈することも可能であろう。すなわち, 直接的な関わり方についての不安は母親の方が強いという結果であったということである。

また, 発達段階によっても, 不安内容の違いがあり, ともだち関係は就学前, いじめ問題は小学生の父親に高い傾向が見られた。就学前児の父親には受験や進学に関する不安や親子関係の不安は見られず, 園, 学校生活など集団生活についての不安は就学前児の父親に多く見られた。子どもの発達段階で重要な問題が移行することが確認された。

養育不安の内容を検討するため, 養育不安が特にないと答えた344人を除き, 自由記述回答に対して, 計量テキスト分析ソフト KH Coder 用いて共起ネットワークを描いた(図1)。この図からは, 子どものともだち関係に関連すること, 受験・進学と学費に関連すること, 親子関係に関連すること, 健康問題, 塾や習い事と家計, 日本の未来と子どもの将来, 性格と教育に関連すること, 保育園・幼稚園, 小学校, 中学校と進学に関することなどのグループが作られていた。

発達段階と共起ネットワークの結果から, 不安内容と発達段階の関連が考察できる。就学前の父親は, 保育園・幼稚園・小学校または家庭において, 子どもが環境に慣れ, 基本的な生活をおくることができるかどうかを心配している。子どもが小学校に入学すると受験・

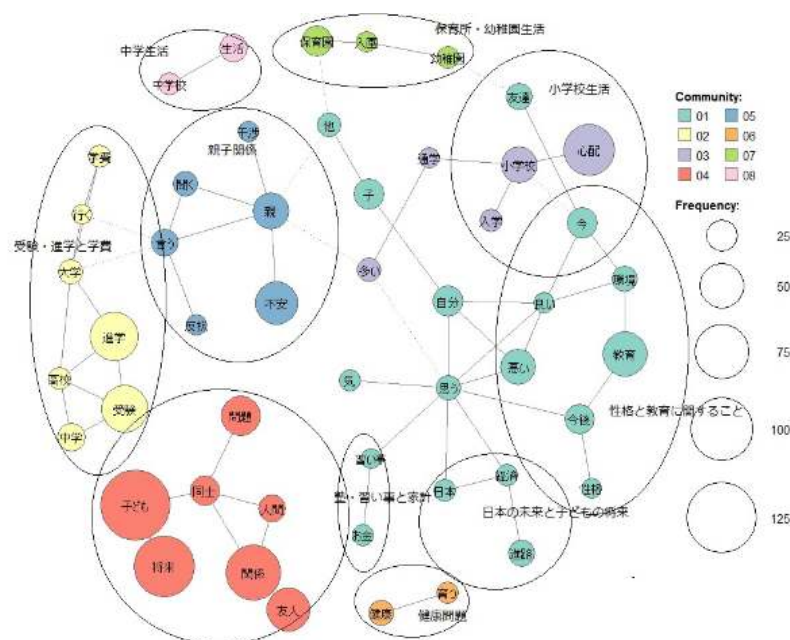


図1 共起ネットワークによる不安内容

進学、学力・勉強、就職・進路など次の段階や将来の進路についての不安が増加する。これは、子どもの発達段階の特徴を反映しているものである。発達段階に関わらずコンスタントな不安は、ともだち関係、学校教育、性格に関するものであった。これらは、年齢に関係なく、子どもにとって重要な事柄であることとらえている。また、健康問題や経済状況、子どもの将来、国の将来についての不安は、就学前で高く、小学校低学年では、一息つくのか低くなり、また次の段階へ進む前である高学年で高くなる。環境が変わるときに家計、将来、国の施策などが気になるのは必然であろう。それと逆の傾向を示すのが、いじめ問題と事件・事故について不安である。就学前は友だちと仲良くするということが養育者、保育者ともに注意するが、そういった環境から離れて学校へ入った直後には、学校でいじめに遭っていないかなど気になるのであろう。事件事故についても、幼い子どもが一人で親と離れて通学することに対する不安であり、いじめ問題とともに独り立ちしていくことへの心配を表していると思われる。このように子どもの発達による不安の変化も父親の養育不安が社会・経済的要因と関連することのあらわれであると考えられる。

ところで、父親は子どもと日々の関わりは少なからず持っている。たとえば、平日でも平均2時間程度、休日になると平均6時間を子どもと過ごしている。休日については十分過ぎているという評価をしているが、平日に対してはどちらかというと不十分であると答えており、否定的である。また、父親の主観的評価として、子育てにかなり関わっているという意見が強い。子どもの生活環境や社会等について不安や悩みを持ちながら、子育てに参加している父親像が見えてくるように思われる。

研究Ⅱの結果と考察

評定尺度を用いて養育不安と関係する要因の検討を行った。尺度は、母親の育児不安研究で使用された山際・渡辺(2006)によつ19項目と、自由記述から作成された32項目を加えた51項目である。検討した要因は、父親および母親に関する要因として年齢、職種(給与形態)、収入、帰宅時間、子どもに関する要因として、発達段階(就学前、小学校低学年、小学校高学年)、性別、きょうだいの数、父親と子どもの相互作用要因として、帰宅時間、子どもと

接する時間である。

はじめに、養育不安の状態について合計得点を算出した。100点満点に換算した場合平均は54点であり、また中間点を超えて不安があるという割合は45%であったことから、不安の強さは中程度であると考えられる。自由記述の結果では26.8%が不安なしという回答であったことに対して、評定尺度を用いて項目を並べると回答傾向が強まるように見える。項目別に見ると、不安得点が高い内容は、経済状況、事件や事故、国の将来や社会情勢、いじめ、という子どもや親をとりまく環境的要因と、自分の時間がない、仕事や趣味が拘束される、という時間拘束的要因であり、不安に感じない内容は、育児意欲がない、子どもをわずらわしいと思う、子育てに自信がない、子どもをどうしつけたらよいかわからない、という子どもとの接し方に関する不安であった。このことは自由記述の結果と同じように父親の養育不安が子どもとの間接的な関わり方に関する要因に強いことを表している。ここでも、直接的な関わりは母親任せにしているということがうかがえる。

養育不安の強さと諸要因の関連については、子どもの性別、きょうだいの数、子どもの発達段階、父親・母親の年齢、父親の収入、祖父母の同居は関連がなかった。また、母親が専業主婦か仕事を持っているかについても関連は見られなかったが、不安の強い父親の配偶者の収入は有意に高かった。これは母親の高収入が母子関係に影響を与えることを父親が不安に思うことを表しているのかもしれない。

父親の収入そのものは不安との関連が見られなかったが、給与所得者はそうでない父親よりも不安が有意に強かった。また、帰宅時間が遅かったり、子どもと過ごす時間が少なかったり、それらの満足度が低い父親の不安が有意に強い。すなわち、子どもと十分に接していないことが不安に影響を与えている。

本研究では、全体を通して間接的要因が養育不安に影響を与えるという結果であったが、子どもとの触れ合う時間が少なくないことが示されているように、父親も子育てに消極的なわけではなく、関わりたい気持ちを持っているが、むしろ社会的要因によって関わる事ができないとことで不安が高くなっているのかもしれない。

次に、不安内容ごとに影響因を検討した。上述のように、職種（給与所得・それ以外の自営業や自由業などの給与所得ではない場合）が不安傾向に影響を与えていることと、自由記述の結果では発達段階によって不安内容に関連が見られるので、職種と発達段階の2要因をとりあげた。全項目のうち、発達段階で差が見られたのは、1人になれる時間がない、などの時間拘束に関わる3項目で、子どもが小さいほどその不安は大きかった。それ以外に差が見られたのは職種による違いであり、子どもの心理的問題についてなどの子どもの発達に関わる内容の8項目、通学・通園について、などの経済・社会的環境に関する4項目、子育てに対する意欲、などの直接的関わりに関する7項目であり、すべて給与職者がそうでない父親よりも不安が強かった。

これらのことから、父親の養育不安に関する特徴は一貫して、社会経済的要因のような子どもに対する間接的要因に不安を持つ傾向があり、直接的な関わりにはあまり不安を持たない様子がうかがえる。これは、父親のあり方が未だに二次的な役割と認識されていることを示している。しかしながら、職種、帰宅時間など子どもとの接触が少ない状況ほど不安傾向が高いことから、子育て参加意欲もうかがうことができると言えよう。

まとめ

本研究においては、父親の自由記述回答から養育不安を抽出し、父親が子どもとの間接的な関わり方に関する不安傾向を持つことを明らかにし、また、それらを用いて尺度構成を行い、関係要因の検討から父親の養育不安の特徴を示した。次の課題として、この尺度の妥当性を再検討し、この尺度を用いて母親の育児不安との比較を行うことが必要と考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

山際 勇一郎 2018 父親の養育不安について—テキスト型データの解析から— 首都大学東京人文学報, 査読無, 514, 11-16.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山際 勇一郎 (YAMAGIWA, Yuichiro)
首都大学東京・都市教養学部・准教授
研究者番号：00230342